

松村昌家

『ヴィクトリア朝文化の世代風景
——ディケンズからの展望——』

東京：英宝社、2012、3,800円、343頁。

玉井史絵

ヴィクトリア朝文化の壮大なタペストリーを目にしたような、そんな読後感の残る重厚な研究書である。著者松村昌家氏は、異なる世代という縦糸と同時代文学・文化という横糸から、ヴィクトリア朝文化という豪華絢爛なタペストリーを織り成していくのだが、その縦糸は『ドンビー父子』の書かれた1840年代から世紀末に至るまで、横糸はロンドン、イギリス、ヨーロッパからはるかトルコ、中国にまで広がっていく。これまで常に偉大な小説を生み出した豊潤なヴィクトリア朝文化に目を向けてきた松村氏は、本書においても小説を無限の広がりを持つ文化的コンテクストのなかで読み解いている。以下、いくつかの概念を中心に本書を簡単に紹介したい。

松村氏はディケンズをヴィクトリア時代の先頭をきった作家、「フォアランナー」として位置づけ、その議論の出発点として第1章で『ドンビー父子』を取り上げている。19世紀の産業主義の波に乗って台頭した中流上層階級の父と息子、父と娘の物語こそが、次世代の作家へと受け継がれていく重要なテーマとなったと氏は指摘する。続いて氏が第2章で論じるのは、メレディスの『リチャード・フェヴァレルの試練』だ。小説では理想の跡継ぎを育てるべく科学的理論に基づいた教育を息子に施して挫折するサー・オースティンが描かれるが、氏はそこにドンビー氏の挫折との共通点を見出している。一方、父と娘の関係は『ドンビー父子』から40年後、ハーディーの『カスターブリッジの町長』で再びクローズアップされることになる。ドンビー氏と同様、ヘンチャードは娘との和解によって人間としての蘇りを経験するが、その娘を再び彼から奪うことでハッピーエンドの結末を否定したハーディーに、松村氏は一つの時代の終焉を読み取っている。異なる世代の作家たちに共通するテーマが、それぞれの時代を反映しつつ、フーガの変奏曲のように独自の展開を繰り返すことを示す氏の議論は鮮やかで刺激的

だ。

父と息子の関係を論じた第1章と第2章で独善的な観念に支配された教育の問題点を明らかにした松村氏は、家庭教育とともに公教育の問題にも注目する。第4章「作家たちのパブリック・スクール」では、トマス・ヒューズの『トム・ブラウンの学校』やアントニー・トロロプの『自伝』から、パブリック・スクールの光と影の部分が浮き彫りにされる。大英帝国を支える「筋肉的キリスト教」精神を体現するエリートたちを育て上げたパブリック・スクールは、同時に階級意識にもとづく強烈的な差別意識が渦巻く場でもあった。貧しい給付生として辛酸をなめたトロロプだが、それでも彼の『自伝』にはパブリック・スクールへの恨みばかりではなく郷愁や畏敬の念が表されている点が興味深い。

ディケンズの同時代人との交流を描いた二つの章では、ディケンズと同様広く民衆に愛された作家と画家が取り上げられる。第3章「ディケンズとアンデルセン—親和と敬遠—」では、海を隔てて文学界に君臨する二人の巨人の交流が描かれる。『即興詩人』や数々のフェアリー・テイルでデンマークのみならずイギリスでも大変な人気を博したアンデルセンは、1847年に初めてロンドンを訪れた際、ディケンズとの対面を果たし、その10年後にディケンズのギャッツ・ヒル・プレイスに滞在することとなった。だが、このせつかくの再会は、アンデルセンの無神経な振る舞いの数々によって、ディケンズにとって大変なストレスとなってしまふ。二人の友情が最終的には不協和音を奏でて終わりを告げる一連の過程は、どこか滑稽で物悲しい。ヴィクトリア朝イギリスにおいて最も人気を博した小説家と画家、ディケンズとW. P. フリスの作品から文学と絵画の交渉を論じた第8章では、作家とともに成長しながら新境地を開拓していった画家フリスの足跡がたどられる。『バーナビー・ラッジ』のドーリを題材とした『笑顔のドーリ・バーデン』から『ダービー・デー』に至るまで、フリスは小説の世界を視覚化しつつ、絵画における独自のナラティブを紡ぎ出し、当時の批評家に「あたかもディケンズが画家になった感がある」とまで言わしめた。

松村氏は同時代人の交流ばかりではなく、異文化の交流にも視野を広げ、ヴィクトリア朝文化の奥行きを深さを読者に示してくれている。第5章『トルコ物語』をたずねて—「水桶とサルタン」の謎解き—は西洋と東洋の文化のつながりを論じていて、本書の中でもとりわけ壮大なスケールを感じさせる章だ。氏は「水

桶に頭をつけたサルタン」という表現がディケンズ、メレディス、ギヤスケルの作品に繰り返し登場することに着目し、その起源がオスマン・トルコの作家シェク・ザーデによる『トルコ物語』であることをつきとめる。ここに収められた物語の一つに、水桶に頭をつけている一瞬に一生を経験するサルタンの話があり、これがフランスを経てイギリスに紹介され、『スペクテイター』の1711年の記事を通じてヴィクトリア朝の作家たちに伝わった。松村氏の探求はイギリスとトルコの接点を指摘するにとどまらず、さらに、この『トルコ物語』の起源が中国唐代の『枕中記』にあるのではないかと推論を進めていく。ヴィクトリア朝の小説とはるか中国の文化との結びつきを指摘する氏の議論に、読者はわくわくするような新鮮な驚きをおぼえるに違いない。イギリスにおけるユダヤ人という異文化表象について分析したのが、第9章「描かれたユダヤ人像—『パンチ』における表象を中心に—」である。イギリス人がユダヤ人を差別と偏見をもって描きつつも、ついには彼らの国会入りを認め包摂していく過程に、イギリス文化の柔軟性や寛容さを見ることが出来る。

本書の最後を締めくくる二つの章では、世紀末に焦点があてられる。まず、松村氏はディケンズの『互いの友』と『エドウィン・ドルードの謎』という二つの小説のなかに、世紀末的人物やアヘン窟の出現したイースト・エンドなど、オスカー・ワイルドの世紀末へと通じる様々な要素を見出し、ディケンズがいかに時代を先取りしていたかを論じる。そして、最終章「ワイルドとディケンズ—イースト・エンドの誘惑—」では、ワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』を取り上げ、彼のイースト・エンドへの執着がディケンズからの遺産であることを明らかにする。

最後にギヤスケル研究をする者にとって特に興味深い二つの章について見ていきたい。第6章『『メアリ・バートン—マンチェスター生活の物語—』における〈二つの国民〉』では、『メアリ・バートン』に反駁した製造業者批評家のW. G. グレグの主張が検討されている。グレグの父、サミュエル・グレグはチェシャー州スタイルにクオリ・バンク綿紡績工場を建設し、村には学校やチャペル、商店、職工学校など労働者のための施設も整備して、理想的な父権の共同体を作り上げた。そんな父を持つグレグが『メアリ・バートン』に描かれた〈二つの国民〉の対立構造に不満を持ったとしても不思議ではない。しかし、一方でグレグは

この小説で取り上げられているもう一つの問題である売春婦問題については「売春婦たちの心情を如実に表現した」として賛辞を惜しまなかった。グレッグは売春という行為において〈売る〉側の道徳が厳しく非難される一方で〈買う〉側の道徳が問われないという当時の社会のダブル・スタンダードに対して、「理性と宗教をともに踏みじめる行為」だと弾劾した。資本家と労働者の調和的な共存共栄関係を希求した父の理想を引き継ぐグレッグだからこそ、前者に対しては厳格な道徳と責任を求めたのであろう。

第7章「マンチェスター美術名宝博覧会—イギリス初の美術の祭典—」では、グレッグのような理想に燃えるマンチェスター製造業者たちの心意気が伝わるような一大芸術の祭典が紹介されている。マンチェスターといえば綿織物の栄えた工業都市というイメージが浮かぶが、この都市は同時に多くの芸術のパトロンたちを擁する文化の中心地でもあった。マンチェスターの資本家たちは、ただお金儲けだけを目的とするような守銭奴たちではなく、芸術を擁護し、それを広く一般民衆に開放するという自らの文化的・教育的使命も十分に理解する人々だった。そんな彼らが総力を結集して実現したのが、1857年のマンチェスター美術名宝博覧会である。総数16,000点を越えるという展示品のなかには、ヨーロッパ絵画と並んで、当時まだ評価の定まっていなかったラファエル前派の絵画も数多く展示された。この博覧会の原動力となったのが、ヴィクトリア朝における文化事業に大きく貢献したアルバート公の呼びかけであったことも忘れてはならない。松村氏は『水晶宮物語—ロンドン万国博覧会1851—』でも、アルバート公の貢献に関して多くの紙面を割いて言及しているが、いずれの事業においても常にアルバート公の念頭にあったのは民衆の教化という理想であった。ヴィクトリア朝文化の発展においてアルバート公が果たした役割の大きさは計り知れないものがある。

ヴィクトリア朝文化の壮大なタペストリーに織り込まれたこれら二つの章は、ともすればロンドンを中心にこの時代の文化を捉えがちな私たちに、もう一つの文化の中心地があったことを気づかせてくれる。〈世界の工場〉を支えた北部の都市の製造業者たちには、自らが産業ばかりではなく文化をも支えているのだという強烈な自負心があった。こうした都市に現存する壮麗なタウン・ホールや赤レンガの大学、美術館、図書館などの様々な建築物は、この地から新しい文化を

創造・発信しようとした彼らの情熱を今に伝えてくれている。松村氏は批評家グレッグ氏やマンチェスター美術名宝展開催のために集結した製造業者たちに着目することによって、より重層的にヴィクトリア朝文化を捉える視点を提供してくれている。氏が与えてくれた視点を今後さらに発展し深化させていくのは、私たちギヤスケルを研究する者たちの使命であると言えよう。

(同志社大学教授)

